

福岡県甘木市の露地ナスに発生する ミナミキイロアザミウマの発生消長

梶谷 裕二・中村 利宣・池田 弘・田中 澄人*・持丸 盛幸¹⁾・西見 利彦¹⁾
篠倉 正住¹⁾・中野 豊¹⁾・釜堀 庄司^{2)**}・行武 博²⁾・小野 剛士²⁾・深見 玉樹³⁾
(福岡県農業総合試験場・¹⁾甘木病害虫防除所・²⁾朝倉農業改良普及所・³⁾甘木市農業協同組合)

Seasonal prevalence of *Thrips palmi* KARNY on eggplant in Amagi city, Fukuoka Prefecture in 1987. Yuuji KAJITANI, Toshinobu NAKAMURA, Hiroshi IKEDA, Sumito TANAKA, Moriyuki MOCHIMARU¹⁾, Toshihiko NISHIMI¹⁾ Masazumi SHINOKURA¹⁾, Yutaka NAKANO¹⁾, Shouji KAMABORI²⁾, Hiroshi IKUTAKE²⁾, Takashi ONO²⁾, and Tamaki HUKAMI³⁾ (Fukuoka Agricultural Research Center, Chikushino, Fukuoka 818, ¹⁾Amagi Plant Protection Office, Amagi, Fukuoka 838, ²⁾Asakura Farm Agent Office, Amagi, Fukuoka 838, ³⁾Amagi Agricultural Cooperative Union, Amagi, Fukuoka 838)

はじめに

ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* KARNYは福岡県においては1979年に初発生が確認された。その後も県下の果菜類、露地栽培のナスを中心に大きな被害をもたらしている。本虫は薬剤による防除効果が上がりにくくこと、増殖力が大きいこと、他のアザミウマ類との区別が困難なことなどのため、農家は定植時より予防的、定期的に防除する傾向がある。そのため薬剤散布は栽培期間を通してかなりの回数となっている。

福岡県甘木市には冬春ナスと近接して夏秋ナスが栽培されている平坦部と、夏秋ナスだけが栽培されている山間部とがあるが、これらの地域におけるアザミウマ類の発生消長を調査した結果、平坦部と山間部とではミナミキイロアザミウマの発生時期に多少のずれが認められたので報告する。

調査方法

調査場所は福岡県甘木市の平坦部4圃場（甘木市大字三奈木2圃場及び同市大字荷原2圃場）、及び山間部6圃場（甘木市大字黒川2圃場、同市大字佐田3圃場及び同市大字江川1圃場）で、品種は大成早生長及び千里長（千里長は三奈木2圃場で栽培）である。定植は1987年4月下旬～5月上旬で、調査は5月11日、28日、6月11日、

22日、7月8日、22日、8月7日、28日、9月9日及び10月12日に行った。5月11日から7月22日までは1圃場30株、1株当たり2～3葉、8月、9月はミナミキイロアザミウマが多発したので、平坦部では1圃場10～30株、1株当たり2葉、山間部では1圃場20～30株、1株当たり2葉を調査した。いずれの時期も葉裏の成・幼虫数を見取りで数えた。なお、各調査時に体色が黄一黄褐色のアザミウマ類の成虫をナスの葉から採集し、種の同定を行った。同定はアザミウマ類の発生の少ない場合には1圃場1～3頭について行ったが、大部分の場合1圃場10頭～50頭程度について行った。果実の被害調査は1圃場70～270果を調査し、果実表面が鮫肌状またはケロイド状になったものを被害果とした。

結果

ナス葉上から各調査時に採集したアザミウマ類成虫の同定結果を第1表に示した。平坦部におけるミナミキイロアザミウマの初発生は5月28日であった。ミナミキイロアザミウマの占める割合は、6月22日は2.4%，7月8日は19%，7月22日以降は90%以上であった。

山間部における初発生は7月8日で1頭が採集された。7月22日には13頭中6頭の発生であった。8月7日以降は平坦部と同様に、大部分がミナミキイロアザミウマとなった。平坦部では7月8日まで、山間部では7月22日まではダイズアザミウマ *Mycterothrips glycines* OKAMOTO、クロゲハナアザミウマ *Thrips nigropilosus* UZEL、

*) 現在 福岡県農業総合試験場果樹苗木分場

**) 現在 福岡県浮羽農業改良普及所

ネギアザミウマ *Thrips tabaci* LINDEMAN 等が多く、その後はミナミキイロアザミウマが優占種となった。

調査を行った平坦部4圃場、山間部6圃場のナス葉上におけるアザミウマ類の虫数及び被害果率の発生消長を第1図に示した。

アザミウマ類は平坦部では5月11日から認め、7月8日から急増した。その後8月28日にピークとなり、10月にかけてやや減少したが多発状態が続いた。山間部では5月28日から認め、8月7日に急増し、平坦部同様8月28日にピークとなったが、虫の密度は平坦部の約20%と

少なかった。

また、被害果率は平坦部では7月下旬から8月上旬にかけて、山間部では8月上旬から8月下旬にかけて約20%から約70%に急増した。

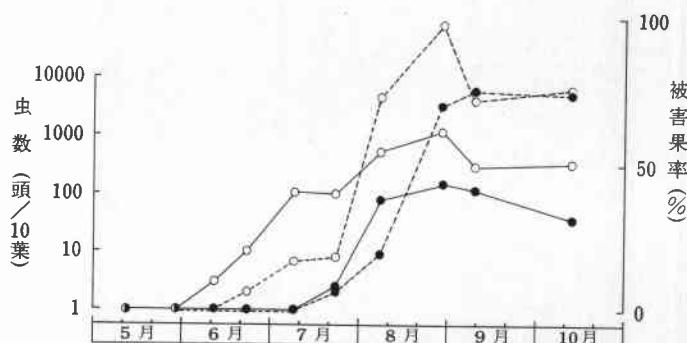
平坦部でミナミキイロアザミウマの占める割合が、約20%から約90%に急増した7月上旬から下旬にかけては被害果率は16.9%から18.3%とあまり増加しなかった。しかし、ミナミキイロアザミウマの割合が90%を超えた7月22日から8月7日にかけては、被害果率は18.3%から73.2%へと急増した。

第1表 甘木市露地ナスから採集したアザミウマ類種構成の地域別経時変化¹⁾

調査 地域	アザミウマの種類 ²⁾	調査時期(月/日)							
		5/11	5/28	6/11	6/22	7/8	7/22	8/7	8/28
平坦部	ミナミキイロ	0	1	0	2	20	32	55	10
	ダイズ	0	1	3	65	67	2	0	0
	クロゲハナ	2	6	4	9	7	0	0	0
	ネギ	0	0	8	7	5	0	0	0
	その他	0	0	3	0	6	0	2	0
	ミナミキイロ の占める割合 (%)	0	12.5	0	2.4	19.0	94.1	96.5	100
山間部	ミナミキイロ	0	0	0	0	1	6	43	55
	ダイズ	0	1	0	0	4	5	2	0
	クロゲハナ	0	1	3	1	0	1	0	0
	ネギ	0	0	0	0	0	1	0	0
	その他	0	0	1	0	0	0	0	0
	ミナミキイロ の占める割合 (%)	0	0	0	0	20.0	46.2	95.6	100

1) 各数値はナス葉上から採集したアザミウマ類の成虫数で、虫の発生が少ない場合には調査葉上で見られた全個体を採集し、発生が多い場合には調査葉上から50頭程度になるまで採集した。

2) ミナミキイロ：ミナミキイロアザミウマ、ダイズ：ダイズアザミウマ、
クロゲハナ：クロゲハナアザミウマ、ネギ：ネギアザミウマ



第1図 露地栽培ナスのアザミウマ類及び被害果率の発生消長

注) —○—：平坦部における密度 —●—：山間部における密度
···○···：平坦部における被害果率 ···●···：山間部における被害果率

考 察

甘木市の夏秋ナスの産地ではミナミキイロアザミウマに対する恐れから、防除は平坦部では5月上旬、山間部では5月中旬から定期的に行われている。ところが、平坦部では7月上旬まで、山間部では7月下旬まで本種以外のアザミウマが大部分を占め、本虫の密度は低いと考えられる（第1表）。これは被害果の発生時期からも推察される（第1図）。

ミナミキイロアザミウマ以外のアザミウマはナス果実に被害を及ぼしていないと考えられ、また、ミナミキイロアザミウマが大多数となった時期から被害が急増して

いるので、少なくとも5～6月の防除は省けると考えられる。

また、ミナミキイロアザミウマの初発生時期については、平坦部の冬春ナスの栽培終了時期が7月下旬ごろであることと関係がありそうであるが、今後の検討を要する。

夏秋ナスの薬剤散布回数は栽培期間を通してかなりの回数となっており、その大部分がミナミキイロアザミウマへの散布となっている。消費者の生鮮野菜に対する安全指向や散布者の健康への影響を考えると、散布回数の低減に努める必要がある。

（1988年5月31日 受領）